

都賀根緒

小川泰堂と
大窪詩佛の
ぶろふいーる

小川乃倫子



目次

1, 都賀根緒	1
2, 関ヶ原	7
3, 詩は詩佛	13
4, 誓願	27
5, 餘慶	50

1, 都賀根緒

「つがねを」と読む。つがねるはいくつかのものをたばねること。束ねるである。「を」は紐または糸。私が

『都賀根緒』に出会ったのは、もう四十年も昔。その年の夏も終わりの夕暮れ。朝出かける前に拙けておいた和書を取り込もうと、二階にあがっていった。天気予報が当たって、一日中晴れて乾いた虫干し日中で、階段のあたりから古書特有の匂いがした。

私の部屋は東と南北に窓があつて風がよく通るので、父は虫干しによく私の部屋を使った。何しろ本の数が多いから、拙げると足の踏み場もない位で、窓際のものを取ろうと爪先立って本の間を通ろうものなら「本をまたぐな。罰が当たるぞ。」と怒鳴られたものだ。

殆どが私には曾祖父に当たる小川泰堂（たかどう）の自筆本で、虫干しが終ると、開いた本を閉じて父に手渡す。どころどころにさし絵が見え、読もうとすると父は「よこせ」

と行って取り上げた。すべて自分の専有物だと思つていたらしいが、どうもよく判らない。

重いダンボールの箱を階下に運ぶのは私の役目。それ以外は手を触れさせない。その虫干しもこれからは私独りの作業になる。

父の雪夫は雅号を華川（かづか）といい嶼月（しづづ）とも称した。若い時は黒田忠次郎や萩原井泉水等（いづみづ）の新傾向の俳句運動に参加し、句集『秋の日』がある。中年以降は『相模国における日蓮聖人の足跡』などの著書もある史家として認められ、世間では温厚な学者で通っていたが、家庭での顔はまったく違う。いわゆる内弁慶（うちべんけい）で気難しく、突然かんしゃくを起こし、ささいな事に激怒した。

父が信奉する宗教では「家族のことを想うのは信仰のさまたげになる」と教えているそうで、どこの家庭でも見られる、父親がこどもにケーキの箱などかかえて帰り「お土産だよ」と差し出す光景は、わが家では一度もなかった。母はいつも髪ふり乱し、縫い物や編み物をして家計を支えた。私はそんな母の姿を見て